

移行対象の発現要因と心理的重要性について

前川 文音

(田中 史子ゼミ)

問題と目的

移行対象 (transitional objects) とは、イギリスの小児科医である Winnicott (1971) が名付けた「幼児が特別の愛情を寄せる最初の“自分でない”所有物」という概念である。例えば『ピーナッツ (Schulz, 1922)』に登場するライナスが肌身離さず持つ毛布や、『クマのプーさん (Milne, 1926)』に登場するクリストファーロビンの友達であるクマのぬいぐるみがこれに該当する。

これらの移行対象は母親への絶対的依存状態から相対的依存状態に移行する段階の乳幼児の下に現れることが特徴であり、母親が自分の欲求にはほぼ完全に適応してくれる内的心的現実にした子どもが、母親の不在によって自分の思い通りにならない外的現実と直面した際の母子分離不安を軽減する役割を担っている。そのため、移行対象所持者にとっては気分が抑うつなときに必要となるものであり、傍に無いと不安を感じるほど心理的に重要なものであるといえる。

そして Winnicott (1971) によると、このような移行対象は子どもが自己と世界との関係を習得するために必要不可欠なものであり、「ほぼよいといえる母親」の下で育った多くの子どもたちの生活にみられる普遍的な現象とされている。また、移行対象を通じた遊びは、子どもの内的現実と外的現実との間である中間領域に現れるとされており、生涯完結することのない現実受容 (reality-acceptance) という作業の重荷を軽減する助けになると考えられている。よって、早期の危機的な時期に移行対象を獲得し、中間領域で遊ぶ経験はその後の子どもの人生においても芸術、宗教、想像力に富んだ生活に付随する大切な発達過程となると強調されてきた。

しかし、欧米圏に比べて日本国内での移行対象発現率は藤井 (1985) によると 31.1%、遠藤 (1990)

によると 38.0% とされており、他の研究でも 30%～40% 台に留まってきた。母親に気づかれていない移行対象がある可能性は考慮するべきだが、これは日本における移行対象が Winnicott (1971) の指摘するように、健常な発達のほとんどの子どもが普遍的に体験する現象とは必ずしも断言できないことを意味している。

この点について国内の先行研究では、それぞれの文化圏にみられる養育スタイルや文化の違いが、移行対象の発現率に差異を生み出している可能性について検討されてきた。遠藤 (1990) は、日本の移行対象発現率が欧米圏やアングロサクソン圏等よりも低く、アフリカ・南インド・イタリアの農村部等よりは高いことに着目しており、日本の相対的な発現率の低さから移行対象を必然的な発達ライン上に位置づける Winnicott の見解に疑問が生じると述べている。その上で、養育スタイルとして添寝の有無と授乳方法に焦点を当てた研究を行っており、就眠様式が移行対象の発現に直接的な影響を及ぼしているとは言い切れないものの、就眠様式や授乳方法の差異による移行対象発現率の高低に有意差が認められた結果から、それぞれの母親の行動に反映される母親の心理的特性や養育スタイルが移行対象の発現に関与している可能性を指摘している。

また、井原 (1997) は、移行対象出現率について日本が 31.7%、中国が 16.5% と中国より日本の方が高いという結果について、中国は日本に比べて身体接触が多い、素朴な子育てをする子育て文化であることが挙げた。他にも、王ほか (2023) は日本と台湾における乳幼児の移行対象を比較し、台湾の出現率が日本に比べて男女ともに比較的高いという結果について、日本と同様に添寝文化で共働き世帯が多く、子育てと自身のキャリア形成の狭間で葛藤することが多い台湾の子育て文化に着目し考察を行っている。

他にも、Winnicott (1971) は移行対象の出現要因として「ほぼよいといえる母親」の存在を挙げているが、遠藤 (1991) は移行対象あり群の子どもの方が移行対象なし群に比べてより刺激に対して敏感な傾向を有することから、移行対象の発現は環境要因だけではなく環境と子の相互規定的な作用という観点からも捉える必要があると指摘している。

このように、これまでの先行研究では Winnicott による主張や国内外における出現率の相違点を文化差や養育スタイル、母親タイプ、子自身の特性の違いによって説明する研究が多くあった。しかし時代の変化を考慮して検討された研究はほとんど存在しない。Winnicott が最初に移行対象を提唱したのは 1953 年であり、約 71 年前ということになる。当時とは子どもが育つ環境も大きく様変わりしているといえる。

特に中間領域での遊びという観点では、スマートフォンやゲーム、サブカルチャー文化の普及で子どもから大人まで幅広く中間領域の世界を楽しみやすい環境になったと考えることも可能である。先行研究をみる限り国内の移行対象経験者は多いとはいえないが、現代社会では多くの人がアニメや漫画などの様々な芸術作品を通じて中間領域で遊ぶ力を保持していると感じられる。よって、今までに提唱されてきた理論をそのまま現代社会の日本に当てはめることが最適であるか今一度検討が必要だと考えられる。

そこで本研究では、まず Winnicott による移行対象を概観した上で、これまでに行われてきた移行対象に関する先行研究を整理し傾向を把握する。そうすることで移行対象の発現要因や心理的重要性、明確な移行対象の種類と線引きについて再検討し、日本の現代社会において移行対象をどのように捉えることがより適切に考察することを目的とする。

先行研究の概観

1. 母親との分離・ほぼよいといえる母親

Winnicott (1971) は移行対象の発現に大きく関わる概念として、「ほぼよいといえる母親」の存在を主張している。そのため、移行対象を論じ

るためにまずこの概念から説明する。生まれたばかりの乳幼児に最初に立ちはだかる課題として、母子分離という問題がある。母親との分離を経験する前の乳幼児は他者と自己の区別がつかず、母子一体の世界観で生きている。そのような状態から健全に母親との分離を経験して成長するためには、Winnicott (1971) の指摘する「ほぼよいといえる母親 (必ずしも幼児の実母である必要はない)」の存在が重要となる。ほぼよいといえる母親とは、最初は幼児の欲求にほぼ完全に適応するが、幼児の成長に従って一人で過ごさせる時間を増やし、徐々に幼児の欲求に対して不完全なものとなる母親のことを指す。ここで大切なことは母親という対象が幼児にとって愛されるものであると同時に憎まれるものとなることであり、そうすることで母親は幼児にとってより外的現実の存在へと変化することができる。このような幻想から幻滅への過程は幼児の発達において必要不可欠なものであり、乗り越えるべき壁といえる。そのような時期に母子分離不安から乳幼児を慰め、助けとなる存在が、Winnicott (1971) が述べる移行現象・移行対象である。

2. Winnicott による移行対象

移行対象と移行現象 (transitional phenomena) の概念は、1953 年に初めて Winnicott によって提唱された。その後出版された Winnicott (1971) によると、「最初の自分でない所有物 (not-me possession)」は、指しゃぶりやテディベア、柔らかい人形や硬いおもちゃなど多種多様な形で出現する。そして、Winnicott によって示された移行対象が必要とされる目的は口唇愛的興奮と満足だけではないことが重要な特徴である。所有物が移行対象となるためには、その対象が乳幼児にとって内側と外側それぞれの境界どちらにも属しうり、対象を自分でないものと認識した上で対象との愛着を習得することが必要となる。つまり、Winnicott によれば移行対象は心的概念ではあるものの内的対象ではなく、また完全な外的対象というわけでもないこととなる。

このような移行対象は、乳幼児が母親との分離を味わい現実を受容していく過程でクッション材のような役割を果たす。つまり、母親を外的現実

に属していると理解できず魔術的統制下に置いている状況から現実の母親を外界の統制下に入っていると理解出来るようになる段階で、乳幼児は万能感からの挫折を味わうこととなる。その際に、移行対象はそのどちらでもない幻想の範囲内に属することで、母親の代理物や象徴としての意味を持ち乳幼児を慰めることとなる。

また、幼児の指しゃぶりと布類やテディベアのようなぬいぐるみでは心理的役割が異なっていることを Winnicott (1971) は指摘しており、前者は口唇性愛的役割であるのに対し、後者は真の対象関係であると述べられている。これらの間には一時的創作活動 (primary creative activity) とすでに取り入れられているものの投影という差があり、幼児が母親の内的表象を健やかに獲得できていることが移行対象および移行現象を体験する上で重要であると強調されている。

これ以降、様々な研究者が Winnicott の研究をもとに移行対象の定義をさらに明確化しようとしており、Gaddini (1975) は指しゃぶりなどの口に入る身体の一部を先駆物 (precursor object) とし、その後に見れる真の移行対象とは明確に区別している。この先駆物での触覚経験を基にして、子ども自身が自分で見つけた無生物物体が真の移行対象であると述べている。また、Busch ら (1973) は、生後1年目の乳児が毛布に愛着を抱き始めることと、2歳児がぬいぐるみへの欲求発達をさせる現象は質的に異なるものであると指摘しており、前者を一次性移行対象、後者を二次性移行対象と呼ぶこととした。そして、口唇愛的な対象であり乳児自身が発見したものではない哺乳瓶やおしゃぶりなどの先駆物は、明らかに移行対象ではないと区別している。

さらに、移行対象のその後の発達として、Winnicott (1971) によると、健全な発達における移行対象は子どもの関心の範囲が広がるにつれて、やがて意味を失うことが示唆されている。これには体験の中間領域 (the intermediate area of experience) という概念が関係しており、体験の中間領域とは Winnicott (1971) によると「幼児が一次的創造性と現実検討に基づく客観的知覚との間に持っている認められる領域」とされている。具体的には他者から認識することのできる外的世界と幻想

の世界に属する内的心的現実の狭間であり、子どもが対象を現実世界のものであると理解しながらも、幻想の世界で遊ぶことこそが対象を意味のあるものとしている。つまり、体験の中間領域での遊びが移行対象を介して行われることが移行対象の持つ意味と考えることが可能であり、移行対象は成長とともに無くなるのではなく子どもの関心の範囲が一つの移行対象から中間領域全体、つまり文化的分野全体に広がっていくという形で残り続けることが指摘されている。

3. 年齢別にみられる移行対象の意味

藤井 (1983) は母親に尋ねる方法で乳児と幼児の移行対象使用方法を比較した研究を行った。その結果、乳児と幼児は両群とも入眠時に最も移行対象が重要となることが分かり、幼児群は「旅行するとき」「ひとりのとき」の重要度が低かったことから、乳児の移行対象使用は加齢に伴い入眠場面に集約されていくと考えられた。つまり、入眠場面は外的世界から内的世界への移行を意味すると考えると、外的世界において移行対象の持つ効用は加齢に伴って少なくなっていくが、外的世界と内的世界の中間における移行対象の効用は保たれるという可能性が示唆された。

一方で、井原 (1991) は事例研究において、引越しをきっかけに現れた二つの移行対象である肌掛けのタオルとゾウのぬいぐるみの使い方に差異がみられたことに着目し、それぞれの移行対象が成長とともに肌掛けタオルは感覚的次元で同じように使われつつ就寝時に限定されていたのに対し、ゾウはさらに対人的な話し相手として人格化されていき、やがて他のぬいぐるみへと拡散していったことを挙げている。このことから、肌掛けタオルが一次性移行対象、ゾウのぬいぐるみが二次性移行対象であるとするならば、特に一次性移行対象が成長に伴い就寝時に集約されていく特徴を持つと考えることも可能である。

そして、移行対象の出現に1歳前後に布、2歳前後にぬいぐるみなどの2つのピークがあることは遠藤 (1989) も明らかにしているが、さらに藤井 (1985) は、一次性移行対象と二次性移行対象では対象が重要となる場面、使用方法が異なることを指摘している。一次性移行対象を使用する子

どもは対象がないと寝つきが悪くなったり泣いたりすることが多く、二次性移行対象は外出時やひとりの時に重要となる傾向にあったことから、二次性移行対象は移行対象の本質が薄れ、遊びの対象としての意味が大きくなっていると考察された。

また、藤井（1985）によれば移行対象の有無と母子関係パターンとの関連が子どもの年齢によって異なることが示唆されており、乳児・幼児期前期のグループである低年齢群の移行対象は弱い心理的密着度を補う母親代理物としての心理的意味があり、幼児期後期のグループである高年齢群では母親の養育態度が与える心理的ストレスを緩和する機能を持つと考えられた。他にも藤井（1988）は、移行対象概念を老年期へ応用し老年期の移行対象について面接調査を行っており、その結果、老人ホームに入居している人にとって移行対象は乳幼児と異なり、物理的な物として扱われることは少なく、より精神的なものの象徴として現れることが分かった。

さらに岩崎（2021）は、幼少期から手放されず移行対象の心理的役割は幼少期から青年期へと変遷をたどることを明らかにした。具体的に、幼少期は情動調整が主な心理的役割となり、児童期には自己効力感の獲得に寄与、青年期には自分を再確認して自己感を強めることに貢献することが指摘されており、幼少期から使用され続けてきた移行対象は青年期においても所有者自身を認め肯定してくれる存在となりうると述べられた。

他にも中根（1995）は、青年期を対象に行った研究で移行対象に対する意識は経験あり群の方がなし群よりも肯定的であることを明らかにした。ストレス対処の点においては、移行対象経験あり群は対処方法の数が多く、おまもりを保持するなど対処様式の幅も広いことが分かり、移行対象の経験有無による青年期の差は、不安の程度というよりも対処方法の違いとして現れることが認められた。

4. 移行対象の発現要因

最初にも述べた通り、移行対象の発現要因については様々な研究が行われてきた。遠藤（1989）は移行対象経験有群と移行対象経験無群を比較して、長期に渡る欲求充足的な母乳哺育と、長期に

渡り継続される添寝がみられる家庭では、移行対象の発現率が相対的に低くなることを明らかにした。一方で池内ほか（2004）は、母乳を与えていた期間が短いほど、移行対象の出現率が高くなるが、長期にわたりすぎても移行対象出現率が高くなるという結果が見出しており、いずれにしても母乳哺育が移行対象の出現に大きく関わっていることが窺えた。

また、遠藤（1989）の研究では移行対象経験有群の母親の方が有意に育児に対して葛藤を覚えるという特徴も示唆しており、王ほか（2023）も台湾と日本どちらも母親の育児に伴う心理的葛藤が高いと、子どもは移行対象を持ちやすいという結果を導き出している。さらに、子供が移行対象を所持している台湾の母親は日本の母親より母性意識の変化が強いことが分かった。

そして、池内ほか（2004）はこれに加えて夫との関係に満足していない母親の子どもに移行対象が出現しやすいことを発見した。このことから、移行対象の出現要因には母子関係だけではなく夫婦関係や父子関係も関与している可能性が示されており、子どもの育つ環境要因が移行対象の出現に強く影響を与えていると考えられた。

さらに、遠藤（1991）によるストレスに対する感受性という視点から気質と移行対象の関係を検討した研究では、女兒の移行対象発現率が男児の発現率よりも有意に大きいこと、一人っ子の移行対象発現率が54.4%とかなり高確率であること、一人っ子を除くきょうだい間に発現率の差はほとんどないことを明らかにしている。さらに、長子移行対象を経験していると次子も移行対象を経験する傾向も示されており、これらの結果から移行対象を発現させやすいある特定の母親タイプが存在するのではと考えられた。

気質の観点では、移行対象有群の方が無群に比べてより刺激に対して敏感な傾向を有することが分かっているため、移行対象の発現には母親タイプや育児スタイルの違いから成る環境要因と、子自身が有する特性の違いによる要因が相互に作用していると考えることが妥当であるとされた。

また、興味深い特徴として、移行対象に関する男女差は他の研究でも確認されており、井原ほか（1997）は日本と中国の移行対象出現率を比較し

た結果、両国共にぬいぐるみなどの移行対象に関しては女兒が男児よりも発現率が高いという結果を確認している。王ほか（2023）も台湾と日本ともに女兒がより移行対象出現率が高いことを発見している。さらに、池内ほか（2004）は、移行対象の種類として男児は女兒に比べて有意に硬いものを好み、女兒は男児比べて有意に柔らかいものを好むことを確認しており、その中でも硬い移行対象は遊びとしての機能が強いことが示された。

5. 移行対象と類似した概念

井原（1992）は、移行対象が母親のプラス面を象徴するものであれば、移行対象は柔らかいものであることが必須条件なのではないかという仮説を立てた。その上で、移行対象に似た概念として自閉対象を比較対象とし事例研究を行った。自閉対象は「移行対象が現実への掛橋であるのに対して、自閉対象は現実への防壁」とされており、固いものであると定義されている。しかし研究の結果、自閉対象の中でも柔らかいものは移行対象的な意味を同時に持っている可能性が示唆された。また、母性的な対人接触のモデルが欠落している事例において、子どもに繰り返しモノを収集する行動はみられたものの、一つのモノに執着する様子は確認されなかった。このことから移行対象となるためには内化のプロセスが起こることが必須条件であると考えられる。

他にも移行対象と近い概念として、山岸（2017）は「想像上の仲間」に着目した。想像上の仲間は現実と空想の中間領域にあり、子どもに影響を与えるという点から移行対象との関連が予想された。結果、想像上の仲間の出現要因に関しては、孤独で支えが必要な者の児童期・思春期に出現し、児童期と思春期では役割が変化することが示唆された。児童期は話し相手やともに体験するものという側面が大きい、思春期は話し相手の面よりも交流を通じて自分を振り返るものとしての機能がみられた。そして、移行対象と同様に想像上の仲間は本人が自ら創造しているが、無意識的に創造される場合の方がより大きな問題を抱えているという見方が可能であった。

さらに、金内（2022）も現実世界に現れる移行対象と空想世界に現れるイマジナリーコンパニオ

ン（IC）すなわち「想像上の仲間」を比較して、ほどよい母子関係なしでも分離不安などのネガティブな対処法として、移行対象やICが発生する可能性について検討している。結果として、女兒、年齢の高さ、一人っ子という特徴を持つ子どもにも移行対象とICがどちらも有意に表れた。また、移行対象を持つ子どもは不安定傾向が有意に強く、繊細で内向的な行動傾向にあり、ICを持つ子どもは思いやりの強さが有意にみられ、共感性の高さが窺えた。移行対象とICの発生要因には性別や出生順位などの子どもの属性が影響していることが明らかになり、育児困難感高群の子供においても発生が認められることから、ほどよい母親でなくても移行対象やICが分離不安などのネガティブな対処法として用いられると考えられた。

そして、大野（2023）は女子大学生を対象に「移行対象」「想像上の仲間」「慰める存在」を比較している。調査の結果、「移行対象」は乳幼児期から児童期、「想像上の仲間」は乳幼児期から青年期、「慰める存在」は青年期以降に多く出現する傾向にあった。それぞれの使われ方や性質には違いがあり、移行対象は触感の心地よさが重視され母親の代理物としての慰めの要素が大きいが分かった。対して想像上の仲間はネガティブな感情を緩和させる意味での慰めの要素が大きく、慰める存在も想像上の仲間と同様に励ましの存在として、より多様な慰めの要素が機能していることが分かった。

考 察

これまでの日本国内の移行対象研究では、まず Winnicott の理論を基に一次性移行対象と二次性移行対象の心理的重要性の違いや移行対象の発現要因を探る流れが主流であった。しかし、2000年代に差し掛かった頃からは移行対象のその後の発達や、青年期に及ぼす影響、「自閉対象」「想像上の仲間」「慰める存在」といった移行対象と関連する概念との比較など、幼少期における母親の代理物としての移行対象研究からより発達した形で研究が盛んに行われるようになった。

その中でも発現要因に関しては、母乳哺育や添

寝の有無といった育児スタイルの違いや、母親の心理的葛藤の有無、夫婦関係や父子関係も要因として含まれていることが示唆された。さらに子自身の気質も重要な要素として存在しており、このことから母親の内的表象を獲得した上で、環境要因と子自身の要因がどちらも作用することで発現方法や発現率に個性を生み出していると推察できた。

また、母親の内的表象を得るという意味では、やはり「ほほよいといえる母親」の存在も軽視することはできない。実際に内的表象の獲得が不十分な事例では、執着行動はみられたものの物という具体的な次元から発展せず移行対象となりえなかったことが確認されている（井原 1992）。

さらに、女兒の移行対象出現率が高い理由としては男女における気質の違いの他に、文化的に男児は硬いおもちゃが与えられやすいことから、一次性移行対象よりも移行対象として認識されにくいより拡散されつつある二次性移行対象の出現が多いためであるという解釈も考えられた。男児は女兒に比べて硬いおもちゃを有意に好むという結果からも、遊びの機能が強い二次性移行対象が出現しやすいと考えられる。

そして次に、移行対象は年齢別に役割や心理的重要性が変容していくことが分かった。幼少期に発現した移行対象は基本的には加齢に伴い、入眠時に集約されるか拡散されると考えられるが、中には青年期まで持ち主に大切にされ続ける移行対象も存在する。岩崎（2021）の研究では、移行対象は児童期に自己効力感、青年期には自己感を高める役割を持つようになると説明されていたが、これは山岸（2017）によって明らかにされた「想像上の仲間」の年齢別でみた役割の変容に似ている。交流を通じて自分を振り返る役割を持つ思春期の想像上の仲間と、自己感を高めることに寄与する青年期の移行対象は近い役割を持っていると推測される。さらに、この二つが心理的に重要とされる要因には自己連続性を高めることで、自己志向機能を果たす力を持つとされている Nostalgia が関係しているのではと予想される（Sedikides ら、2015）。そのため、青年期における移行対象は本来の移行対象が持つ母親の代理物としての心理的重要性が継続されているというよりも、そこから得られるノスタルジックな感覚がより重要視

されている可能性を考慮する必要があると考えられる。

心理的重要性の観点では、藤井（1985）の研究で低年齢群における移行対象の役割は心理的密着度を補うものであるのに対し、高年齢群では心理的ストレスを緩和する役割を持つとされていた。この低年齢群に発現する移行対象を一次性移行対象、高年齢群に発現する移行対象を二次性移行対象と解釈すると、やはり一次性移行対象は Winnicott が最初に提唱した従来の移行対象的役割を持つものであるのに比べ、二次性移行対象は役割がより広い形に変容していると推測できる。具体的には、より多様な慰めの要素が機能するようになった「慰める存在」に近い役割も含むようになっていくと考えられる。

このことを踏まえると、「慰める存在」は移行対象の延長線上に存在し、移行対象のその後の発達として入眠時に集約されていくことが多い一次性移行対象と、人格化され拡散していくことの多い二次性移行対象では、二次性移行対象の方が青年期まで大切にされる移行対象として選ばれやすいという仮説が立てられる。さらにこの場合の移行対象は「慰める存在」としての要素の方がより強いのではないかと考えられる。移行対象は Winnicott の指摘するようにやがて意味が失われるだけではなく、思い出せばその人を励まし、慰める存在として生まれ変わり、残り続けることもあるのではないだろうか。

つまり、これまでの先行研究では青年期まで大切にされ続けた移行対象を、「かつて移行対象だったもの」としてではなく、現在進行形で「移行対象」として扱う研究が多かった。だが、全ての事例において移行対象として捉え続けることが本当に適切か慎重に検討することが必要となるだろう。

最後に、現代社会における移行対象の立ち位置について考察する。近年、スマートフォンやゲーム機の普及により、幼い頃から子どもが電子機器に触れる機会が増えた。実際にショッピングセンターなどでは、母親の買い物中にスマートフォンを使って YouTube を観たり、ゲーム機でゲームをしたりする子どもを見かけることが多い。その中にはまだベビーカーに乗るほど幼い子どもも少なくない。このことを踏まえると、このような硬

い電子機器が移行対象として作用するようになってきていると予測することが可能だ。

しかし執着行動がみられたとしても、スマートフォンやゲーム機を単純に移行対象として捉えることが適切であるかという点には疑問が残る。従来の布やぬいぐるみといった移行対象と電子機器の間には、中間領域を乳幼児が自分自身で一から生み出すか、情報という形で与えられるかという差がある。移行対象は乳幼児自身によって発見、創造されることで初めて意味を持つとされてきたこれまでの研究を踏まえると、スマートフォンなどは一次性移行対象でも二次性移行対象でもない新たな概念として考えることが適切であると考えられる。

そのため今後は、移行対象の出現率とともに移行対象の種類を改めて統計的に検討し、インターネット社会において移行対象の種類や出現率に変化がみられるのか確かめる必要があるだろう。仮説としては、母親の代理物として精神的密着度を補う側面の強い一次性移行対象の出現率は今までとあまり変化は起こらないが、遊びの機能が強い二次性移行対象の内容は一部スマートフォンなどに成り代わり始めていると考えられる。

また、それによって物としての移行対象よりも、作品やコンテンツとして形のない存在が慰めの機能を持つ事例が増えていくのではないかと予想できる。よって、その点も踏まえて移行対象研究が今後も行われていく必要があると感じられる。

文 献

- Busch, F., Nagera, H., McKnight, J., & Pezzarossi, G. (1973) *PRIMARY TRANSITIONAL OBJECTS*, Journal of the American Academy of Child Psychiatry, Volume 12, Issue 2, 193-214.
- 遠藤利彦 1989 愛着物の発生因の解明：移行対象と Maternal Attachment (発達 5C), 日本教育心理学会総会発表論文集, 31 巻, 第 31 回総会発表論文集, 197.
- 遠藤利彦 1990 移行対象の発生因の解明：移行対象と母性的関わり 発達心理学研究, 1 巻, 1 号, 59-69.
- 遠藤利彦 1991 移行対象と母子間ストレス 教育心理学研究, 39, 243-252.
- 藤井京子 1983 乳幼児の移行対象の使用に関する発達の研究, 日本教育心理学会総会発表論文集, 25 巻, 第 25 回総会発表論文集, 94-95.
- 藤井京子 1985 移行対象の使用に関する発達の研究 教育心理学研究, 33 巻, 2 号, 106-114.
- 藤井京子 1988 移行対象概念の老年期への応用に関する研究, 日本教育心理学会総会発表論文集, 30 巻, 第 30 回総会発表論文集, 106-107.
- Gaddini, R. (1975) *The Concept of Transitional Object*, Journal of the American Academy of Child Psychiatry, Volume 14, Issue 4, 731-736.
- 井原成男・庄司順一 1991 発達 291 移行対象の発達の意味 (7)：移行対象と気質, 日本教育心理学会総会発表論文集, 33 巻, 第 33 回総会発表論文集, 197-198.
- 井原成男 1992 移行対象の発達の意味 (8)：Hard object について (発達 C (10), 口頭発表), 日本教育心理学会総会発表論文集, 34 巻, 第 34 回総会発表論文集, 160.
- 井原成男・汪玲・庄司順一 1997 移行対象と気質の日中比較 日本教育心理学会総会発表論文集, 39 巻, 第 39 回総会発表論文集, 170.
- 池内裕美・藤原武弘 2004 移行対象の出現・消失に関する社会心理学的規定因の検討：生育環境と夫婦間ストレスの視点から 社会心理学研究, 19 巻, 3 号, 184-194.
- 岩崎美奈子・井原成男 2021 青年期女性の語りにみる移行対象の心理的役割の変遷—手放されない移行対象に焦点をあてて— 質的心学研究, 20, 133-148.
- 金内美也子 2022 移行対象およびイマジナリーコンパニオンの発生要因に関する心理学的再考 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 白百合女子大学発達臨床センター紀要編集委員会編, 16-26.
- 中根淑子 1994 移行対象経験と青年期の母親イメージとの関係 日本教育心理学会総会発表論文集, 36 巻, 97.
- 中根淑子 1995 移行対象経験とその後の発達 日本教育心理学会総会発表論文集, 37 巻, 第 37 回総会発表論文集, 481.

- 王怡今・森定美也子 2023 日本と台湾における乳幼児の移行対象の出現に関する比較研究 聖路加国際大学紀要, 聖路加国際大学紀要委員会編, 27-34.
- 大野翠子 2023 女子大学生の癒しの存在と心のゆとり感の関連について: 「移行対象」「想像上の仲間」「慰める存在」の観点から 臨床発達心理学研究, 22, 3-15.
- Sedikides, C., Wildschut, T., Routledge, C., Arndt, J., Hepper, E. G., & Zhou, X. (2015). *To Nostalgize : Mixing memory with affect and desire*. *Advances in Experimental Social Psychology*, 51, 189-273.
- Winnicott, D. W. (1971). *Playing and reality*. UK: Routledge. 橋本雅雄・大矢泰士訳 (1979) 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社
- 山岸明子 2017 子どもにとって「想像上の仲間」がもつ発達心理学的意義: 6つの文学作品をめぐって 順天堂保健看護研究, 41-52.